

【会員研修】

特定非営利活動法人カムイ大雪バリアフリー研究所

就労継続支援事業所 チーム紅蓮 五十嵐 真幸 氏



それでは始めさせていただきます。特定非営利活動法人カムイ大雪バリアフリー研究所チーム紅蓮(ぐれん)の五十嵐と申します。今日は、どうぞよろしくお願ひします。

「みんなが笑顔で暮らせるまちづくりを目指して」私の中でも、このタイトルつけさせていただきます、私たち車イスのメンバーで街づくりをしながら地域で暮らしている様子を紹介していきたいと思ひます。まず私の紹介となりますが、五十嵐真幸と申します。障害名は骨形成不全症です。最近テレビなどで骨形成不全症の方が出てきたり、東京の方でアプリの開発をして、時代を変えるような社長さんがいたり、活躍している人が多い中、私はあまり何もできていませんが、同じように障害を持っていますが、みんなが動けるような、暮らしやすい街になっているのではないかと感じています。今、役員として地域と関わらせていただいています。自己紹介をするにあたって動画を観てもらった方が良いのではと思ひましたので、ご覧ください。

動画の内容から(NHKのニュース映像から)

- ・高校時代 旭川龍谷高校では野球部に所属、スコアラーとして活躍している
- ・登下校は保護者(母親)が送迎
- ・学校の階段の登り降りなどはクラスメイトが補助
- ・野球との出会いは兄の試合を見たとき、野球チームに入ったのは小学4年生のとき
- ・中学校3年生のとき、スコアラーとして全道大会準優勝に貢献しました。
- ・野球部では選手をもちたてて元気づけることを心がけています。
- ・野球と関わることで、仲間と大きな喜びを感じました。

私は生まれつきの「障がい」なので、小学校に入学するとき、養護学校か、普通の学校のどちらの学校にしようか、親が悩んでいたそうです。そういった診断のときに「この子は会話もできて、普通に勉強することができるから普通学校に行った方が良いのではないですか」とアドバイスをもらって普通学校に行きました。

当時 20 何年前か前、30 年前になるかもしれませんが、あまり車イスの方とか障がいのある方が普通学校に行くことが少なかった時だったと思ひます。もちろん「養護学校に行かなかったの」という声もありましたが、簡単な話、私は友達が欲しかったのです。養護学校は友達ができわけではありませんが、家の近くに養護学校がなかったので、近所の学校に行けば友達がいて、家に帰ってきたら、また外に出て遊んでいるという事ができると思ったので、普通学校に入りました。野球部ではもちろん自分でプレーする事ができませんが、友達から「一緒に入ろうよ」と誘われたときとときに、当時コーチだった方から、「野球には 10 人目の選手がいるんだよ。」と言われ、スコアブックという役目を教えてもらい9年間学校でプレーすることができました。しかし、高校へ行くと、みんな甲子園を目指して真剣に取り組んでいて、遠征や地方大会とかたくさんあるので、入るのをやめようかと思ひていました。野球部だった仲間や先輩が「野球やりなよ」と誘ってくださって、自分も一緒にスコアラーをすることができました。学校では困ったことがなくて「障がい」があることを忘れていました。先ほどの様に家族が送ってくれ、友達が階段を上げたり、荷物を持ってくれたり、普通に学校が終わったら部活に行って、また買い物も一緒に行って、車イスでもみんなと一緒に同じ様な時間を過ごすことができたことで、幸せな生活を送っていました。高校では就職または進学かを選ぶことになり、残念ながら私は頭が良くなかったのと、特に目標もなかったので仕事をしようと思ひました。まず自分でお金を稼いで

「1人暮らしがしたいな」「車が欲しいな」「自分で好きな時間をつかいたいな」「家も欲しいな」「趣味を楽しみたいな」誰もが将来明るいものを夢みて過ごしていると思います。自分の夢や目標がふくらんでいて、特に何をやりたい訳ではなかったのですが、誰かの役に立ってお金をもらって、自分ひとりで暮らして、地域社会に飛び込んで行きたいと思って、進学じゃなく就職を選びました。履歴書をたくさんの会社に送りました。

学校を卒業してからの1年は、道の臨時職員をやらせていただいて、私は納税課で公務員を経験しました。初めて研修した課が納税課だったのが、だめだったのかもしれないのですが、誰も会話をしません。私も窓口だったので、少し笑顔や大きな声で会話してしまうと、怒られるところなのです。税金を滞納される方がこられるところなので、クレームがすごく多いです。「何を笑ってるんだ。公務員のくせに」という形でクレームを言う方がいるので、ここでは笑顔を見せないようにと言われました。1年間職場にいたのですが、今でもつながっている人は一人もいなく、知り合いも一人もできなかったという職場でした。もちろん北海道の転勤族で、みんなでワイワイガヤガヤする職場ではなかったので、私には向いていないと勝手に判断してしまいました。今、色々な人達をみて、そういう課だけではないと、分かったのですが、当時は公務員はこういうところなのかと思い、公務員を目指すのを止め、次の会社へ履歴書を送りました。しかし、しっかりスーツを着て、履歴書の写真4cm×3cmの写真を送りましたが、それだけでは、身長や体重、また、どんな身体の形をしているか分からないですし、車イスと書いてあるだけで断られてしまいました。もちろん面接もしてくれませんが、書類選考だけで落とされてしまいました。何件も落とされているうちに、「ちょっと面接ぐらいして欲しいな。」「ちょっと会ってもらえないでしょうか。」と問い合わせをしました。しかし、「ウチは車イスでは難しい職場なんだ。」「車イスのトイレがない」「段差がある」「事務所が狭くて車イスが入っていかないんだ。」という理由で断られてしまいました。結局、壁というのは能力ではなく、学歴でもなく、「障がい」だったのかなど感じています。このときは「どうしよう」と悩んでいて、「まあ、何とかなるさ」ぐらいにしか思っていなかったのですが、今考えると障がいを持っている人、障がい者採用といっても、目に見えないような障がいをもった人が採用されているなど、旭川は車イスってことで壁があるのではないかと思います。障がいは様々だと思うのですが、私の場合、肢体不自由です。いろいろな障がいがある中で、最近感じるのは、同じ障がいでも全然程度が違うということです。

私の障がいでは、1型から7型、8型とあるのですが、同じ型でも全然違います。やはり、それは小さい頃から骨折をして変形した箇所によって違うとか、リハビリの仕方が違うとか、その様に障がいを持っていても車イスでも、1人1人違うことを私自身も分かりました。これは社会では、まだ理解してもらえていないと思います。車イスというと足が悪い、足が動かないというのが、子どもを含め、多くの人が同じように思っています。私は少し立てますが、車イスから降りたときびっくりされた経験があります。

次にバリアですが、「物理的なバリア、制度的なバリア、文化・情報面でのバリア意識上のバリア」等、当時は全くこんな事を考えていなかったのですが、私が高校を卒業して就職しようとしたとき、「どれが当てはまるのだろう」と考え、ある意味全部だったと思います。多くの人は物理的なバリアと意識上のバリアと思うかもしれませんが、当時20年前、障がいを持った人が働くことについて、私自身が情報をもっていませんでした。視覚障がいのある人が避難するとき、看板や物が分からないこと、聴覚障がいのある人だったら何が起きているか分からないということもバリアの1つかも知れません。私自身も情報収集しなかったというよりも、実は周りに情報がなく「自分で何ができるのか。」「何がしたいのか」全く分からない状態になっていました。

さて、皆さんはすでに、車イスの身体障がい者のサポートをしたり、目の当たりにすることもあると思います。私は車イス駐車場の意味を子ども達に伝えていますが、車イスの人は幅を要するのです。ドアを全開にしないと乗れないということを、子ども達に伝えていきます。最近では Youtuber などいろいろな方が発信しているのですが、そもそも伝え方の違いによって難しく、伝えられていないのではないかと思います。

映像を使って紹介します。

《駐車場の真ん中にコーンが置いた映像》

車場の真ん中コーンが置かれている場合、何のために置いてあると思いますか？介助される方、運転される方は、障がいのない方がほとんどだと思いますが、私たちは自分で運転することができます。自分で運

転するとき、これをよけなければいけません。

《駐車場で車イスから自動車への乗車、車イスを自動車に入れる様子を撮影した映像》

この方は頸椎損傷で、車の事故で下半身がまひしています。体幹もないので、違う体制で座ってしまうと転がってしまいます。自分1人で運転できるのですが、握力もなく何とか腕の力だけで生活をしています。ただ、自分で車イスを車に乗せなければいけないので、いろいろな工夫をしながらやっています。電動で車イスを持ち上げるというのがありますが、制度的な問題、資金的な問題、本人のプライドもあり、「自分で車イスを積むんだ」とやっています。これをけっこう真面目にやっているのですが時間がかかってしまいます。この日は晴れているので良かったのですが、雨の日や雪の日だったら、車イスを後部に積むために、自分のお腹の上をタイヤが通過していくため、雨でタイヤが濡れているので、「中がべちゃべちゃになるんだよ」と笑っていました。ここで子どもに伝えているのは、「やろうと思えばできる人」「練習すればできる人」がたくさんいるのだけれど、「乗り降りするには、どうしても駐車幅が必要で、時間がかかってしまう。」ということを知ってもらうようにしています。このようにリアルな映像を見てもらって、「車イスの方は大変なんだ。」でも「車だって運転できるんだ。」ということを理解してもらっています。悪い部分と良い部分をみせると、きっと「大変だろうな。」と子ども達は思います。しかし「運転できるんだ。スゲー」と思ってもらえるようにしていきたいです。子どもに教える事で何がかわるかということ、子どもは運転しませんが、お母さんや家族に伝えることができます。

《前の動画の人より握力のある人が、車イスを自動車に載せる様子を撮影した動画》

この方は心臓が悪く、手術によって心臓が血行障害となり下半身がまひしてしまいました。ただ、先ほどの方と違って握力があるので、「あつという間に車イスを積み込むことができるよ」話をさせてもらってます。「そもそも、運転はどのようにするの？」といわれるので、手動装置を見せます。

《工作中的事故で足を切断した人》

この方は工作中にゴミ収集車に挟まれて足を切断しました。「両足がなくて大変だろうな。」と思うのですが、本人曰く「これがさあ、小さくなって身動きがとりやすくて何でもできるんだ」と言い、あつという間に助手席から車に乗りました。けがをした1年後にはスポーツをやるとうことでパラリンピアンになっていました。なかなかの優れたものです。中途障がいだったり、生まれつきだったりで身体能力が違ったりしますが、子ども達に、この様にいろいろな障がいの人が出て、車椅子でも全然違うんだよということを見てもらうことが、私たちのやっていることです。

《自分の生活の様子》

私が講演するときは、半分私生活を見せています。今日はまさに自宅から発信していますが、実は私歩けなかったんです。1年に1回骨折をしてしまい、勿論体も変形をしてしまいました。しかし、やっぱり社会に出て一人で何でもやっていくうちに、ちょっと車椅子で入れないところは、立ち上がったたり、伝え歩きをしたりしているうちに少しずつ歩けるようになりまして、今では、少し歩いて生活をしています。運転もしています。昔はトイレに行くにもお風呂に入るにも、何するにも家族にサポートしてもらって生活をしていました。やっぱりそれが周りを見て自分でできるのっていいなと思っていたことから、一般就労を目指して自分でお金を稼いで、一人で暮らしをしていきたいなっていうふうな思いをもって、これまで生活してきました。今は2人の子どもがいます。よく子ども達から「うわ、小さあ！」って言われますが、最近色んな方達と会うと、何も言わずに「ああ、こんにちは。」っていうふうにみんな言ってくれるようになっていきます。なので、どんどん見てもらって知ってもらうことが、すごくいいことなのかなって、私自身勝手に解釈しています。

しかし体の変形があつて、今でも歩く形、歩き方で、すぐ腰が疲れてしまいます。また、身長が小さいので、何でも背伸びをしないといけないので、「五十嵐さんってどうやってお風呂に入るんですか。」とか「五十嵐さんってどうやってトイレをしているんですか。」とか、子供達からたくさんの質問があります。全部に答えられないので、動画を見てもらい工夫すれば何でもできるんだよつと子ども達に伝えています。冷蔵

庫の一番上は届かないので、台を使ってやっています。多少は色んなことができるのですが、やっぱり重い荷物を持ちたり、家だったら雪はねをするのが大変とか、洗濯機も自分の高さから取りやすいようにドラム式にしたり、掃除機も今ほとんどコードレスが流行っていますが、こっちの方が自分で持って掃除機がかけやすいとか、家電もいろいろな物が出て、やはり値段もそれぞれ違うので、使いやすい物を選び、自分でできることを増やそうとしています。いずれは歩けなくなるだろうということを見越して、家にはスロープを作ったり、段差をなくしたり、トイレもちょっと広く作ったりして、一応老後のことも考えて作りました。じゃあ、このあと力のなさそうな骨の弱い私がどうやって車に乗り降りしてるかということです。車椅子を私はみんなと同じように持ち上げることはできません。なので、助手席から車椅子を引っ張って、ドーンって出すだけです。乗せるときも同じように、よっこいしょと引っ張って乗せることができるのです。自動車にどうやって車椅子を乗せるかということも車屋さんと一緒に考えてくれ、今はノアに乗っていますが、ノアのステップは段差がないので、自分で運転して出掛けられるってすごくいいなと思っています。障害があっても、みなさんもご存じの通り、当たり前ですけど、「地域で暮らしているんだよ。」「でも、仕事と生活、好きなことができる環境作りを私たちは目指していきたい」ということで、活動させてもらっています。

今紹介した仲間達も社会に出てから出会った仲間です。私自身、小学校から高校まで普通の学校に通っていた中で、同じように障がいを持っている人の知り合いや仲間が全くなくて、「社会に出たときに障害が進行したから会社をクビになってしまった。」「けがをしてしまったら仕事なくなりました。」「終には恋人も失ってしまった」など本当に失うものばかり多い人達を見ていて、じゃあみんなで何かしようよということで始まったのが、私たちの活動だったのです。

目的はただ一つ、車椅子や障がいをもっている人が一人一人違うってということを知ってもらおうということで、旭川の買い物公園の商店街に行き、お店の人達とも一緒にタウンウォッチングをするような企画をしました。これに至る前は買い物公園を行ったり来たりしていると見られ、ご飯を食べに行くと、「あ、車椅子の人来た。どうしたらいいんだろう。」ということで、当時は椅子をどけてくれる人もほとんどいませんでした。その中、オーナーさんがいろいろな人に興味をもってくれ、「俺も乗って自分の店入ってみたいな」と言ってくださり、企画したのが買い物公園の商店街の方達と一緒にタウンウォッチングでした。そこが私たちの原点でした。タウンウォッチングをしていると買い物公園の人達が知り合いになっていき、「ちょっと、またご飯食べに来てよ。」と言われ、行く度に椅子を引いてくれるようになりました。もっと仲良くなると、私たちが、椅子に乗り移れるってことを知り、「どっちにする？どこに座る？」というふうに席を自由に選ばせてくれるようになってきました。それは、「車椅子から降りて椅子に座ってもいい」し、「空いているのだから、どこの席でもいいよ」ということで、今では、ほぼ当たり前のような対応になってきています。当時旭川の買い物公園は、あまり車椅子の人達が入り込んでいなかったもので、車椅子利用者のことを知ってもらうことができたので、自然な対応してくれるようになり、どんどん仲良くなって私たちは地域に入っていくことができました。

そこで、当時結成したのが、「車いす紅蓮隊」です。名前で、愚連隊って愚かな連なりって書くのですが、「車椅子で自由に振る舞おう」「車いすの人達が地域にあまり見かけないから、障がいを持っている人達のことを知ってもらおう」、悪いことをするわけではないのですが、どんどん活動して愚連隊のように暴れ回っていかうというような意味で名付けられました。当時僕を支えてくれる会社の社長さんがいて、その社長さんにいろいろな所に連れて行ってもらいネットワークが広がってきました。このときのこの活動をグッドデザイン賞に応募しまして、受賞することができました。グッドデザインというのは、今は物だけではなくて、このような活動とかも評価していただけるってということで、私達の取り組みが認められてきたかなと思っています。

私達がやったことは、情報と魅力の発信です。楽しいことを見つけること、できることを作ること、そして、できないことやバリアを知ることで車いすユーザーだけではなく、障がいをもっているユーザーの発信も始めました。みなさんが地域で暮らしている中で、一番の問題になるのが、トイレなのではないかと思っています。トイレの困りごとってきつとあると思います。介助されてる方や、本人もそうですが、車いすトイレは車いす以外の人も使うでしょうし、車いすといっても障がいも違うし、程度も違います。私自身は車いす用トイレは必要ありません。しかし、車いす用トイレを必要としている人もたくさん見てきて、「どうやって使っている

の？」とたくさんの人に聞いてきた中で、「やっぱり使い方が違う」と思い、子ども達や大人の方々にも車いす用トイレについて伝えていきます。みなさんの方がもっと詳しいと思いますが、ベッドが付いていたり、子ども用のチェアが付いていたり、いろいろな物が付いているのがあります。どんな車いすでも使える、「誰でもトイレ」というトイレです。このマーク、車いすマークだけでもいいのですが、「トイレがあった。」と思い扉を開けた瞬間に、ただ広だけのトイレを見ると、広いことが車いす用トイレだと勘違いしているのかなと思います。これを作った方は当時、私達の仲間は背もたれがないと座れない、手すりも左側にしかないから使えない、トイレトーパーも届かない人がいるとか、当たり前ですけどオストメイトがないから使えないということなど、障がいによって使える、使えないというふうになります。特に私も最近気付いたのが、オストメイトを使う人を一瞬イメージしてみてください。みなさんはすでに障がいの分野に詳しいので、社会一般のオストメイトを想像できますが、まずオストメイトやストーマを知らない人が多いことを説明をした後に、次に必ずイメージに出てくるのが、立って歩ける人をイメージします。私が一緒に働いている仲間で、車いすユーザーでストーマを付けている人がいます。その仲間はオストメイトの台は高いので使えないということを初めて知りました。仲間は、「実はオストメイトの台を使えなくて、トイレの便器に流しているんだよ」と言っていました。なので、そんな 100%のトイレなんて作ることはできないので、写真で事前に情報収集することができたらと思って、旅行に行く前に、トイレ選びができるように写真で情報を発信するようにしています。正直どこのトイレも基準化してもらい、これがトイレだっていうものを作ってもらった方が問題は起きないのかもしれないですけど、やはり障がいの程度によって使える、使えないっていうのがあり、どうしても 100 点の物を作っても使えない人が出てきてしまうと思います。

私達は勉強会もしています。買い物の勉強会、バスに乗る勉強会、タクシーに乗る勉強会などいろいろなことを勉強させてもらっています。特にバスの勉強会に関しては障がいをもっている人、車いすの人、そして乗務員さんが勉強しています。また、それだけではなくイベント化し、旭川で開催されていた「バリアフリーおもちゃ博」というイベントでおもちゃバスという形で小さな子どもたちと一緒に乗ってもらい、バスを運行する。その中で学生には、バリアフリーについての紙芝居をやらせようなど、楽しく伝えるような工夫もしながら、旭川では活動しています。

乗車勉強会もやっています。ここで一番大事なのが、乗れるか、乗れないかを運転手さんに教える勉強会だけではなくて、自分がバスとかタクシーに乗れるかどうかという勉強会もしています。ここ最近の車椅子は、介助用の車椅子や病院にある車いす等、全然違うものに乗っています。ただ、乗務員の勉強会は、介助用の車いすのみになってしまい、私達が乗っている車いす用では、「あれ、これどうするんだろう。」とやっぱり迷ってしまい困ってしまいます。私達自身もバスに乗りたいという思いを持っている人を集めて、自分の車いすのどこの部分に固定フックを引っ掛けると早いかなどを覚えてもらう勉強会をしています。もちろん、自分で伝えることができない障がいをもっているので、フックをかける部分にマーキングをすとか、ここに掛けてくださいっていうことが分かりやすくなっていけば、車いすの故障もないですし、運転手さんもすぐに「ここと、ここと、ここね。」と迷うことなく掛けることができます。ましてや、ユニバーサルデザインというかUDタクシーとかも今出回っていますが、「車いすの人が乗れないじゃないか」とか「乗せてくれないじゃないか。」ということも多々声を聞きます。乗ったときに嫌な思いをされている方もいると思います。1点だけ確認してもらいたいのが、このタクシーは、全ての人に乗れるとは言い切っていないということです。障がいをもっている人でも乗れる可能性を広げましたっていうものなのです。もちろんすごく大きい車いすに乗っている方だと、このタクシーのタイプだと乗ることができません。これを作った企業も乗れないっていうことは重々分かっている、たくさんの人達の活動によって分かっているのですが、「やはり地域で乗れないから乗せない」という拒否が起きてしまいます。それはどうしてかという、まず1つ目が、運転手が私達のことを分かっている。それは、実はどんなに重度な障がいをもっているでも移乗をすることができる車椅子ユーザーも中にはいます。「移乗できれば乗せてあげられるのだけだね」と知ってもらうことによってコミュニケーションが取れ、問題は減るんじゃないかと思っています。

もう一つが、自分の車いすでは乗れるか乗れないかを実験した上で、「乗れないことを知る。乗れることを知る」ことが当事者の勉強なのではないかと思っています。どうしても乗りたいのであれば、実はこれは、バ

スもそうなのですが、通常3日前とかに予約しないといけないのですが、毎回乗っているユーザーだどこから乗っても、予約も何もなくても、乗せてくれるようになったりします。なので、知ってもらったり、利用し続けることによって結構動いてくださる会社さんもたくさんいらっしゃいます。いろいろな問題が地域にはあります。みなさんもご存じかもしれませんが一人一人の考えが違うことで起きる、タクシーに乗ったときの割引制度があります。乗ったときに障害者手帳を見せないといけないのですが、見せると個人情報につながるから、見せたくないというような問題が今まで過去にあったかもしれません。確かに手帳を見せたくない場合は、それはそれで仕方がないのですが、その割引って誰が割り引きしてくれてると思いますか？バスもタクシーも割引って国や市から補助金をもらっているわけではなく、実はその会社の優しさじゃないですけど、社会貢献として割引制度をつくっており、実は会社負担です。それを有効に使わせてもらわなければいけないと思ったときに、障害者手帳を見せる必要があります。見せないと本人が乗ったかどうかの確認ができないそうです。「もし見せなかったり、見せたくない、でも私は障害者だから割引してくれ」ということであれば、正直障害をもってない人を乗せたときにも割引をしている可能性があるということで、企業側の信頼の問題でこのようになっているのです。「しっかり確認させてもらっているよ」というのが、こういう割引制度です。

他には、子どもたちとの触れ合いということで、小学校に私たちのことを伝えに行ったりしています。知ってもらってことがやっぱり全てにおいてつながることなのかなって風になっています。

(動画より:旭川「さんろくまつり」、「全日本玉入れ選手権」の様子)これは今コロナ禍で中止になって、今年は復活するだろうという旭川の「さんろくまつり」です。私たちがやっているのは、車椅子で露店を出しています。お祭りでは、人混みの中車椅子で行くとお尻しか見えないので、足をひいてしまったりぶつかってしまったり、すごく嫌な思いをされるって言う方が多かったので、お店を作ってしまうと、みんなが端っこから人を見られることからお店を出しています。そして神輿も担いでいますが、私たちだけではなく、約20基ぐらいのお神輿が誰でも担げるUD神輿です。お神輿を台に乗せて担ぐことによって、視覚障がいであったり、聴覚障がい、または小さな子ども、外国の方、いろんな方が参加できる神輿となりました。これは、今度は沿道の真ん中を神輿が通るのですが、当時始めた2009年は、「ダメよ、こんなの。注目されるだけだから。」と言っていた車椅子ユーザーたちも多かったのですが、今では100人近く参加してくれるぐらいの神輿となりました。すごく小さいお神輿なので、人がいすぎてお神輿が見えないという問題が発生したお神輿です。これも当時は、やりたくない、人前に出たくないという障がいをもった方が多かったのですが、今ではどンドンやりたいていということで、恒例行事となってやらせてもらっています。

そして、車椅子でできる玉入れです。和寒町で全日本玉入れ選手権大会やっていて、おそらく札幌で運動会かなんかでこのデモンストレーションがあったかもしれません。札幌ドームで開催されたスポーツフェスティバルだと思いますが、車椅子でできる玉入れのルールを考えてやっています。実はまだ一回しかやっていないくて、コロナになってしまったのでできないのですが、これも通常の玉入れ選手権大会に出ている人たちが高齢化してきて、やっぱりみんな、障がいをもっていないでもなく、何か一つの道具を使ってできるルールを考えたいという思いで、実行委員の方たちが一緒に車椅子でできる玉入れルールを考えてくれました。これも今後は、本当はもっと重度な方でも楽しめるようなルールにしていきたいと思います。(動画終了)

プレイすることだけがスポーツではない、今パラリンピックのパラスポーツが有名になってきていますが、すごく重度な障がいの方はボッチャにチャレンジされている方もいます。自分たちで活動できるメンバーは、スポーツにチャレンジする人が多いのですが、私みたいにすぐ骨が折れてしまうような病気の人たちはあまり激しい競技をすることができません。なので、私たちが指導員として、障がい者スポーツ指導員を取得し、そしてボッチャの審判も取得し、審判としての関わりをさせてもらえるようになってきています。

障がい当事者が主体となったイベント参加、イベント企画ということで、私たちがイベントの主となり地域の人たちと作ることをしています。どれもコロナで中止になっていますが、「バリアフリーおもちゃ博」というのは、おもちゃとスポーツと音楽で障がいの有無に関わらずみんなが楽しめるイベントにしようという内容で、二日間開催で毎年やっています。二日間で1万人来てくださるイベントです。事務局は全て私たちのところでやっているので、会場を三つに分けて開催していて、すごく準備が大変です。どちらかと言うと、参加だけではなくて企画もやらせてもらえるようになってきています。やりたいことを楽しむということ

で、車椅子の子どもたちが「これやりたいんだよね」「ちょっとゴルフやってみたいんだよね」とか「雪の中で野球やってみたいんだよね」「キャンプしたいんだよね」ということを考えみんなで一緒に企画し開催しています。ただ、私たちがここですごく大事にしているのが、障がい者のイベントにはしたくないということです。地域の障がいのない子どもたちや家族にも参加をしてもらい、誰でも参加できる、みんなが一緒に楽しくやろうというようなイベント開催を目指しています。そのようなネットワークが広がっていくことで、これまで一緒にできなかったスキー授業が子どもたちと一緒にできるような環境も整ってきているのかなと思っています。

ここから、私たち就労継続支援施設チーム紅蓮っていうのはどういう思いで作ったのか、簡単にお話ししていきます。「地域に必要としてもらう」「誰かの役に立つ」「社会人として当たり前の仕事をして私たちを知ってもらうことで、生活もしやすくなるのではないだろうか」という思いを持った仲間が集まって仕事をしています。仕事の内容は、もしお時間があれば後でホームページを見てもらえたらと思いますが、自分でも何しているか分からなくなるぐらいたくさんあります。それは何かを作って売られることをされている事業者さん、委託でゴミ袋を折るという作業をされている事業所さんもありますが、私たちの事業所はお願いされた仕事や、委託の業務ももちろんやりますが、地域の人から「こんな仕事お願いしたい」「困っているんだ」ということを引き受けてやっております。

私も含めて、肢体不自由の仲間の進路について、選択肢の狭さがすごくあるという話をよくします。①一般就労、②就労継続支援、③生活介護、いろいろもっと選択肢はあるかもしれないですが、うちに来てくれる一緒に働いてくれる仲間はこの三つで壁があるのかなというふうに思っています。じゃ、何の壁かという、聞いた中では、①制度の問題、当たり前ですけど通うのが大変。②支援者の問題、なかなか理解してもらえない、③施設の問題、就労継続支援施設なのに、車椅子対応になっていないというところもまだあります。④障害の問題、これは結構実は多いのです。何がお伝えしたいかと言うと、これまで生活介護に行っていた障害の方たちが就労したいという希望をどこまで答えられるかっていうことを私たちはやっていたりします。もちろん現実的に諦めなければならぬこともあります。やっぱり願うことってなんだろうっていうのを再確認しなければいけないかなと思います。私がこのような活動を始めた時に、同じように障害をもっている子どもを持たれている親御さんに「五十嵐君は動けるからいいよね」と言われました。「動けるからからいい」と言うときがないと思います。私よりもっと動ける障害をもっている人もいるし、むしろ私にとったらパラリンピアンはすごく羨ましいですし、そういうふうにならないものねだりをしてしまうのはよくないと思ひ、動けないんだったら動けないなりにやりたいことをやれることを考えるべきなんじゃないかなと思っています。それを手伝えることがもし可能になれば、夢は叶っていくのかなというふうに思っています。

今、うちに来ているメンバーの中に、これまでは生活介護だったのではないかなと思う方も、何名かいます。しかし、出会いは人生を変えるということで、地域の人たちと出会って、すごく大きな成長を遂げている人たちもたくさんいます。その一人目が、私と同じ病気でもっと障がいの方が重たい方です。本人の許可をもらって、しかもこの文章も本人が全部考えてくれていますので、ちょっとだけ紹介します。チーム紅蓮に来るまでは、実は骨折の頻度が多くて家からあまり出られませんでした。特別学級に通っていたんですけど、学校の先生が家に来てくれて授業を受けていました。なので、親、親戚、ヘルパーしか出会わなく、友達もできなかった。周りは外で遊んだりしているのでもいいなと思っていました。高校卒業して違う作業所に通っていましたが、本人は、赤ちゃん扱いをされたと本人は言っており、私は一人の女性で、もう二十歳にもなってこんな扱いをされたくないなっていう思いがあって辞めてしまいました。私たちは出会って、行ってみたい、楽しそう、働いてみたいっていうことを、勇気を出して伝えて通い始めました。この気持ちを伝えてって、誰に気持ちを伝えたかってここに書いてありますが、「親に」って書いてあります。実は、本人曰く、これは親が見ていたら怒られるかもしれないですけど、第一の壁は親だったそうです。やはり親は大事に育ててくれて、もし何かがあったらどうしよう、どうするのと心配をしてくれるのはもちろん分かりますが、本人はもっと社会に出ていきたいという夢を持っています。人生が変わった、今はいろんな仕事をしていて友達もできて友達とご飯にも行けるようになった。まだ親が送迎をしてくれており、まだそこは甘えていますが、「いつかは福祉的サービスを使ったり、一人暮らしをしていきたい。そして自分の意思をはっきり伝えられるようにしていきたい。親の顔

色を伺わなくても自分でやりたいことを伝えていけたらもっと自分が変わる」という思いをもって一緒に活動している仲間がいます。

もう一人は、下田昇兵さんっていうレシピ本を作った仲間がいます。彼は今ではもう本当に自分で身動きをとることももうできなくなりました。でも、周りに出会った人達が料理人であったりとか、ソムリエ、野菜ソムリエだったりとか、そういう人たちと地域で出会えたことによって、本を出版することが出てきたっていうのが彼の人生です。そして「やっぱり出会ってすごく大切なんだなあ」と思うのですけれど、NHK で風間くんと会いました。また取材をしてくれた日テレの方は、プライベートで旭川に遊びに来てくれました。NHK で会った方は、新婚旅行で旭川に遊びに来てくれました。出版社の方と執筆者の方は、なんとプライベートで、娘連れて遊びに来てくれ、下田さんと動物園と一緒に رفتり、そういうふうになんかつながったきっかけで、出会いが知り合いや友だちがたくさんできるようになりました。

STV の宮永さんは、みんなで写真撮らせてもらって、うちの事務所を取材してくれたのですが、「今度うちのスタジオに遊びにおいでよ」、と呼んでもらい、下田君が札幌に遊びに行ってスタジオ訪問をしました。なぜかカメラマンもついてきましたが、このようにたくさんの人たちに支えてもらって、生活ができています。彼は、今は話すことも食べることも自分で起き上がることも何をすることも自分ではできなくなってしまいましたが今でもこうして仲間たちがサポートしてくれています。

そしてもう一人鈴木颯太さんという方です。この方も高校卒業して今うちにきていますけれど、夢は BGM を販売したりとか音楽づくりをすることです。今動画がすごく主流になってきているので、自分の作った曲を挿入してやってもらいたいという夢をもってやっています。彼も、バリバラに出演したことがあります。このように、まずやりたいと思えば時間がかかってもできることがあるよってことを、ちょっとこれだけ見てもらって終了にしたいと思います。

では、うちの事務所の様子です。(チーム紅蓮の紹介ビデオが5分適度)

ふざけた動画ですけども、撮影しているからこうなっているわけではなく、毎日こんななので、すごく騒がしい事務所です。今、色々な企業の人たちが仕事をくれたり、お手伝いをくれたりしてくれていますが、「障害をもっていても、いろんなことができるんじゃない」「むしろその個性に応じて、いろんなことがサポートし合いながらできるんだよね」ということを知ってもらえてるんじゃないかなと思います。私たち車はいすですが、知的障がいなどのメンバーも働いています。実は彼らは私たちのサポートをしてくれたり、私たちができないことをやってくれたり、お互いもちつもたれつ連携しながら仕事をすすめています。「強みを活かして一緒にやっているよ」というのがチーム紅蓮であり、地域で一緒に生活をする仲間であり、いろんなことにこう挑戦しながらできたらと思っています。その人ができるかできないか、合うか合わないかというのをマッチングできたらいいと思っており、いろいろなことをやっています。「難しいことができないなら仲間のサポートができるかい」とか、「農業ができないなら受注管理や収穫管理というパソコンはできるかい」とか、「スポーツができないなら私たちのように指導員ができるかい」とか、「事務局企画運営はできるかい」とか「座ってでもできる仕事」など、現地に行ってできるような仕事分担をしながらできたらと思っています。すごくいろいろなことをやっているのですが、実は 20 人以下でやっています。だんだん体がしんどくなってきたのでどんどん仲間を増やして、一緒に活動できたらと思っています。このような活動を Web や SNS で発信しているので、もし良かったら見ていただけたらと思います。

長くなってしまいましたが、これで話を終わります。

【全体講評】

全国特別支援教育推進連盟理事長
宮崎英憲氏



はじめに、「肢体不自由のある子どもたちの一人一人の生きる力を育むために PTA 活動はどうあるべきか、過去からつながる 明日へひろげる 北海道から目指す夢の미래のカタチ」という主題に基づいて、北海道大会が開催されました。まず、第 65 回全国肢体不自由特別支援学校 PTA 連合会・校長会合同研究大会の講評にあたりまして、大会実行委員長様をはじめ、本大会に関わられました全ての皆様の並々ならないご苦労に対して、深く敬意を表しますと共に、心からお礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、一昨年度大会は中止、そして昨年度大会は期間を設定しての web 開催ということで実施に漕ぎつけられました。本年度大会をどのような形での実施するかについて、様々にご検討され、このようなオンライン開催になったと伺っております。

大会に向けた準備、大会運営等、主題に込められた「北海道から目指す未来のカタチ」が意図された研究大会となっていると感じました。特に「会員研修」、「北海道大会アトラクション」では、北海道大会実行委員会の企画力・底力を見せていただきました。全国の皆様には、この北海道大会が様々な学びをもたらしてくれることと期待しています。それにしても動画等を拝聴してみて、やはり北海道に皆様と集いたかったと感じた次第です。改めまして、素晴らしい大会運営ありがとうございました。

《基調講演》

基調講演に、特別支援教育長官の菅野和彦先生が、「特別支援教育の動向と肢体不自由教育への期待」と題して、お話を頂戴いたしました。日頃から、特別支援教育の新しい情報を届けていただいていることに感謝しております。講演では 4 項目でご指導を頂戴いたしました。各分科会での発表ともつながる内容であり、その関連から私の印象に残った 2 点についてお話をさせていただきます。従前から、一人一人の能力や可能性を伸ばしていくことは、肢体不自由教育の原点であると述べられていることを思い起こしながらお聞きしました。また、文部科学省の施策の動向に、なお一層期待しながら、私どもは注目していきたいということも思いました。

1 つ目の「医療的ケア関係」についてです。医療的ケアに関しましては、昨年 6 月に法律が成立しました。医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律という、いわゆる医療的ケア法といわれているものです。ここでは立法の目的、基本理念、国や公共団体の責務、そして支援の対応についての措置について書き込まれた法律であるということです。

特別支援学校における医療的ケアの現状について述べられた箇所もございました。年々、医療的ケア児の数は着実に増えています。それを支援する看護師、認定特定行為業務従事者の数も増えているということです。この最初の棒グラフに関しては、特別支援学校の幼稚部、小学部、中学部、高等部で医療的ケア児がどれくらいいるかということに加えて、通学をしている子と、訪問のお子さんについているグラフです。小学部を見ますと通学児童が 3296 名、訪問が 999 名と、圧倒的に多くが通学をするようになっています。全体を見ましても、ほぼ 3 倍、今まで訪問の方が多かったのが、着実に通学をしている子が増えているということです。この点について注目する必要があるということです。また、看護師、あるいは認定特定行為業務従

事者の数も増えているわけですが、看護師の数がまだまだ十分でないということが、このグラフから見て取ることができます。

次に幼稚園、小学校、中学校、高等学校の医療的ケア児の現状です。特別支援学校と比べて、まだまだ医療的ケアを通常教育の中で受けている子は少ないのですが、それでも着実に増えているという状況があります。このグラフをご覧いただくと、医療的ケア児の中で特別支援学級で学んでいる子がまだ、通常学級よりも多いというのがおわかりかと思います。通常の教育においては、看護師の数が大半を占めているということが、特別支援学校とは違ったものとなっています。

具体的に医療的ケアの項目について見てみますと、特別支援学校は喀痰吸引（口腔・鼻腔）でしているお子さんが多いということと、胃ろう関係ですね。後は気管切開部の管理というのが多いです。一方で小中学校では、気管カニューレによる喀痰吸引が多いということと、あとは導尿関係です。これは自己導尿を除くということになっているのですが、この数が大変多いということ、血糖値の測定とかインシュリンの注射の数が多いうのが特徴になっています。

付き添いの状況について調べているというのがありました。これは付き添いなしの数が増えてきているのですが、それでも付き添いが半数以上ということで、この付き添いの在り方について調べている中身がございませう。医療的ケア児の付き添いの必要なものとして、看護師、特定行為業務従事者がいても教育委員会が希望している数というのが結構あるという問題があります。このことについて、私どもはどのように考えて、今後どのように対応していったらいいかということも含めて検討していく必要があると考えています。それから小中学校についても同じような問題がありますが、圧倒的に医療的ケア児の場合は付き添いをしてほしいという要望が多いということなどについても、今後十分に対応を検討していく必要があると思っ

ているところでは。さて、菅野先生のお話「第3次学校安全の推進に関する計画」についての説明がございました。これは、今年度の2月の中教審で答申があつて、3月に閣議決定されて、この令和4年度から令和8年度の5カ年にかけての、学校安全に対する対応について検討された中身です。なぜこういう計画が盛り込まれたかという課題の認識、施策の基本的方向性、そして5つの推進方策があります。この中で私が注目したのは、家庭・地域・関係機関との連携・協力による学校安全の推進ということでは。今回の研究協議の中でも、このことに関する分科会発表がございました。3番目のところが学校における安全に関する教育の充実についてです。基本的な方向性と、家庭・地域・関係機関との連携・協力による学校安全の推進ということが、すごく重要になってきているということで、私どもPTAの活動の在り方としては、ここを念頭に置きながら学校と連携・協力して学校安全の推進を進めていく必要があると思ひながら、菅野先生のお話を聞かせていただいたところでは。

2つ目に、肢体不自由校教育への期待と充実について、今回はGIGAスクール構想のみお話をいたします。GIGAスクール構想の拡充は、かなり多額の国費が投入されていることが、この予算額からも見て取れると思ひます。実は、このことに関しては令和元年6月に「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策」というのが、文部科学省で最終まとめをされました。新時代における先端技術を効果的に活用した在り方について、新時代に求められる教育としてSociety5.0の到来を念頭において検討された中身です。この中で、子どもたちの多様化が大きな話題となつていて、つまり障がいのある子どもたちをどんな形で支援するのか、誰一人として取り残されることのない個別、最適化された学びを推進するためにこの仕組みが大切だということでは。そしてこれに関しては、ICT環境を基盤とした先端技術、教育ビッグデータを活用される教育現場として、教員の視点、子どもの視点、教育委員会の視点、保護者の視点、国・研究機関の視点ということで、具体的に書き込まれています。そして、具体的に先端技術の機能に応じた効果的な活用についても、論じられている中身でございませう。これを受ける形で令和元年の12月にはGIGAスクール構想の実現パッ

ケージ、令和時代のスタンダードな学校へということ、環境整備、標準仕様の例示と調達改革ということで、いわゆる学習者の端末の標準仕様、そういったものをしっかりと整備を進めていくということで、5点にわたっての工夫がパッケージとして盛り込まれ、ロードマップが築かれているということです。ある意味、最先端の動きを進めているのが肢体不自由者である児童生徒に対する教育で、具体的な補助具等を使った支援の在り方について書き込まれたものです。これは菅野先生からもご指導のあったところでございます。なお、このことについては「はげみ」という日本肢体不自由協会が出している冊子がありますが、8月10日発行の8・9月号に、ICT活用に関しての具体的な内容が書き込まれておりますので、ぜひ見てもらうとよいと思います。大変参考になる冊子となっております。

《会員研修》

まず「会員研修」について、講師は五十嵐真幸さん。NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所チーム紅蓮というところに所属をされていまして、「みんなが笑顔で暮らせるまちづくりを目指して」ということでお話をいただきました。昨年8月、夏期のパラリンピック東京大会が開催されて、ちょうど一年前のこととなります。障がいのあるアスリートが世界から集いました。そして競い合う姿は多様性（Diversity）への理解を促す契機となって、日本が共生社会の実現に向けて飛躍する、大きな試金石となることが期待される大会となったと思います。

今年度の五十嵐さんのお話は、私は大変衝撃を受けました。旭川市で只今、実践中の様々な取り組みの一端、当事者目線での研修の動画の紹介をいただいたことなど、非常に画期的なものでした。障がい者の暮らしや仕事が、住民の理解を得て、ごく当たり前が存在する街に移行しつつある、まさに共生社会の実現が現実のものとなりつつある思いで聞かせていただきました。

五十嵐さんのお話の中にある冒頭の学校時代は、私にとってまさに目から鱗のようなお話でした。みんなのおかげで困りごとが全くない、障がいがあることを忘れていたとおっしゃっていました。仕事をしようという段になって、初めて障がいを意識し、社会を知るために、好きなことができる環境づくりを目指すということで、非常に前向きな姿勢を一貫して貫かれていました。地域の人たちとつながるために、私たちを知ってもらうことに、そのためにタウンウォッチをされています。知り合いが増えて、そして16年前には勘違いをしていた、「障がいがあるからできないじゃなくて、強みは障がいなんだ。そしてそれを生かして一緒に仕事をしよう。」ということと、チームメンバーの事例を紹介していただいているところです。

街ぐるみで、障がいのある、なしにかかわらず、一緒になって働く街づくりをしようということが始まっているということで、本当に私もびっくりした次第です。NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所チーム紅蓮の皆さんのますますのご活躍を願うとともに、そして五十嵐さんたちにはさらに大きな地域づくりの力になっていただきたいと思った次第です。ありがとうございました。

《分科会》

6つの分科会からお話をいただきました。まずは第1分科会から第6分科会で発表されたいずれの学校も、コロナ禍にあって令和2年度以降の活動が困難ないしは停止状態のやむなきに至っています。そして今年度になって、改めてPTA活動の意義・内容・課題に気付きが出てきたとのこと。これまでの継続が大事なんだ、そしてさらにこれを発展させるためにどうしていくかというようなことなど、累々と語られておりました。特に第1分科会の奈良養護学校（奈良県）のお話は、これからのPTA活動はどうあるべきかということについて、参加しやすさとか意味のある活動を再構築していきたいということで、具体的な活動ぶりをお話ししていただいているのですが、これは全ての学校に共通する課題なのではと思います。

第2分科会の高松養護学校（香川県）では防災のこと、第3分科会のかがやきの森支援学校（熊本県）で

は福祉サービス、第4分科会の郡山支援学校（福島県）では進路の実現のための活動、第5分科会の桜が丘特別支援学校（千葉県）では摂食、災害対策、医療的ケアについて、そして第6分科会のいしかわ特別支援学校（石川県）では在宅訪問についてのオンラインのこと、ICTですね、こういった発表を総合して感じたことは、どの報告からも菅野先生の講演内容を改めて咀嚼することの重要性を再確認しました。

分科会発表に対しては、私は発表に関しての基本的事項を確認の意味で、3点お話しさせていただきます。

1点目は、大会要項に掲載された発表要旨が大変わかりやすく、よく整理された発表となっています。これは、皆さんに伝える基本情報の大切さに加えて、用意周到な発表準備が大事だということを改めて感じ取ったということでございます。

2点目は、分科会の発表に関して各単産のPTAのチームワークの良さを感じた次第です。チームプレー・連携の大切さ、これは何を意味するかというと、日頃の活発な活動の表れだと思います。ここの大切さを改めて感じました。

3点目は、分科会の視聴に関して、各校でワークショップの手法を取り入れて、分科会のテーマ・内容にそった協議が行われることを期待したいです。他校の実践に学ぶことの必要性、主体的・対話的で深い学びというのは、今回の学習指導要領の大きなキーワードです。私たちPTAもこのことを留意しながら、ぜひ学びあいたいと思っていますところであります。

年々、分科会の発表・運営が充実していることを感じております。ひとえに、会員の皆様方のご協力と講師の先生方の指導助言の賜物と心から感謝いたします。

さて、最後に研究主題に関わって、私から提案を一言申し上げます。来年に向けて、次の2点を提案します。1点目は、学校とぜひ一体となって子どもを育てていくPTA活動をめざしていただきたいということで。2点目は、チームワークを大切に、地域・社会と連携した共生社会を目指したPTA活動をぜひご期待申し上げます。この2つの観点を、より意識した発表を期待します。今回の研究主題、「過去からつながる 明日へひろげる 北海道から目指す夢の미래のカタチ」を受けて、関東・栃木県に受け継がれ、さらなる発展をご期待申し上げます。

印象に残る実り多い研究大会であったことに感謝いたします。全国各地での、皆様のご活躍とご健勝をお祈り申し上げ、全体講評に代えさせていただきます。ありがとうございました。

【全体講評】

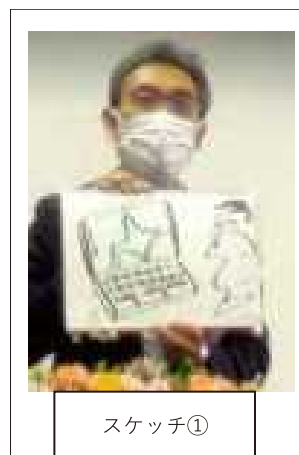
全国特別支援学校肢体不自由教育校長会会長 伴 光明 氏
(東京都立多摩桜の丘学園 校長)



只今御紹介いただきました全肢長会の伴でございます。よろしくお願いたします。今日、朝からご視聴されている方々、たいへん実りのある内容の濃い会であったかと思ひます。お疲れさまでした。

先ほどチーム紅蓮・五十嵐様のお話、動画での御紹介、まだわくわくするような熱い思いが胸のあたりに燃え盛っている気がいたします。一日を通してこの北海道大会が本当に無事に運営されたこと、心からお祝い申し上げたいと思ひます。事務局の皆様、北海道の役員の皆様、ありがとうございました。お疲れさまでございました。

さて、これは(スケッチ①)、私がお昼のアトラクションで、北海道の映像を見てびっくりして口があぐりしている、という絵でございます。今日はどのようなものが拝見できるのかなと思ひておりましたら、各学校あるいは北海道の特色いろいろなものを見ることができ、30分ほどの映像だったでしょうか、北海道に行けたような気持ちがするなと思ひました。とてもよい企画だったと思ひます。ありがとうございました。



そして分科会、「good challenge」と書いてあります(スケッチ②)。「うまくいった」部分と「しまった」という部分があった分科会だったかと思ひます。今、宮崎先生からも御講評いただいたとおり、発表内容はどれも充実したものでした。ただ、このオンラインでのウェビナーをやっていくにあたって、私たちの技術に未熟なところもあった、というところが「しまった」という部分ですね。「うまくいった」部分は、あちらこちらで、今日初めて出会った人ともオンラインでお話することができました。このことが、北海道の皆さんが大切にされたことですね。北海道と日本中の各地と、顔が見えてお話ができるということが、この大会で実施されたことなのだろうと思ひます。かつての大会では、実際に皆さんが集まって親睦を深めながらいろいろな情報交換ができたのですが、それがなかなか難しい状況にあつて、北海道から発信して皆さんとつながる、それをWeb上で実現したかった、その「good challenge」に対してうまくいった、これは本当によかったと思ひます。「しまった」という部分があるとすれば、これからまだもう少し技を極めてできるようにしていけるとよいのかな、と思ひます。



今のこの「しまった」話のところですが、ウェビナーであるとかブレイクアウトルームが繋がらないというときに、つながった方はよいのですが、うまくつながらなかった方はとても不安に襲われませんでしたか。今、画面上で「そうなのよ。」と言っているよう気がします。そうでしたよね。とても不安だったと思ひます。

ここからが本題になってきます。北海道大会のテーマでは「つながる」「過去とつながる」という言葉を出していただきました。「過去とつながる」ということは、「これまでの肢体不自由の学校の歴史に、しっかりと目を向けていきましょう」という意味合いです。今、私は「つながらない不安」ということを例に出しました。「つながる」というキーワードが、今回とてもクローズアップされていると思います。

そして、「明日へひろげる 未来のカタチ」ということで、この「つながる」ことがどうやら明日へつなぐ、広がっていく、未来のカタチづくりにつながっていくのだ、ということがテーマに盛り込まれているのだろう、と理解することができます。先ほどのつながらない不安ということも考え合わせてどのようなことが言えるのかと申しますと、私がかねがね思っていること、言っていることなのですけれども、私たちがつながりたいもの、つないでいくものとはこのようなものがあると思うのです。(スケッチ③)



スケッチ③

時間、空間、三つの＜間＞。時間は、テーマにあるように歴史的なつながりなどが含まれると思います。空間的なつながり、北海道、日本中、広いですよね。でも、その空間を飛び越えるようなつながり。時間のつながり、空間のつながり、そしてもうひとつの＜間＞は、何でしょうか。お分かりいただけるでしょうか。最後は＜人＞ですね。時間と、空間と、人間と、この三つの間とつながっていきたいし、この三つが繋がったときに何か広がっていけるのではないかと、時間的な広がり、空間的な広がり、人間関係の広がり、を目指しているのだな、私たちはそういったことをとても楽しみにしているのだな、というように思います。今回のこの大会が、時間的、空間的、人間的な広がりを御参加の皆様にもたらしめてくれたのであったとすれば、それはたいへん成功だったと、立派な会であったと言えるでしょう。

最後になります。アナログとデジタルは融合しなくてははいけません。宮崎先生が GIGA スクールのお話をされた後で恐縮ですが、私はスケッチブックを出しております。でも、これでもよくはありませんか。デジタル技術でアナログなものをお伝えする、ということもありなのではないかと思えます。私は別にパソコンを使わないとか嫌いと言っているわけではなくて、もちろん使うのですが、今日のこの会を拝見しながら思いついたことや考えたことを書き留めていくには、このスケッチブックの方がやりやすかったのです。パソコンに向かって、「こちらの発表がこうで、そちらの発表がこうで…」と作業するよりは、拝見しながら皆さん方と描いていく方がやりやすかった。その結果、こうやって皆さんにお目にかけてお話をしています。

いろいろなつながりやいろいろな広がりを願う生身の体をもつ私たちです。新しい技術を使うことで、デジタルにアナログな情報をのせて私たちはつながっていける、今日の大会を通して、私が学びとして感じたことです。私が感じた学びを皆様にお話しさせていただくことで、また皆様がそれぞれお考えいただいて、これから先に向かって何をされていかれるのか。大会の研究主題は「肢体不自由のある子どもたちにとって、一人一人の生きる力を育むために、PTA 活動はどうあるべき？」でした。今回私どもが考えるべき主題が提示され、この大会に臨んでいます。今日の皆様の学びをもとに、明日からの PTA 活動に生かしていただければと思います。

たいへん長い時間、皆様どうもお疲れさまでした。明日からも頑張っていきたいと思います。私からの話は以上でございます。どうも失礼いたしました。

【大会宣言文】

全肢P連「北海道大会」実行委員長
北海道手稲養護学校PTA会長 松田 朝美



本連合会は肢体不自由の子供を抱える保護者が互いに手を携え、わが子が学ぶ肢体不自由特別支援学校の教育がより良いものになってほしいという願いを胸に、その輪を大きくしながら今日に至っています。

「わが子の障害がどんなに重くても学校生活を送ることができる」。このことは今では疑う余地のないほど普通のものとなっています。しかし43年前養護学校が義務教育となる前までは、私たち保護者の悲願でありました。65年前産声を上げた本連合会も養護学校創成期から校長会をはじめ関係機関と心をつなげて、時代とともに変わりゆく社会の中でその時々課題に向き合い、学び、考え活動につなげてきました。

「学校に通えるようになったならその環境を良くしたい、環境が整ったら充実した教育を受けさせたい、教育でつけた力を生かして障害があっても地域で豊かに生活させたい」と私たち保護者のあたりまえの思いや願いを絶やすことなく脈々とつなぎ、願いを形にできるよう活動してきました。

国の動向としては直近では令和3年1月に中央教育審議会が「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の答申を発出、同年9月には「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」が施行、またGIGAスクール構想により教育の基盤整備を進めるなど、国としてもインクルーシブ教育の充実、共生社会の実現を目指し、特別支援学校のみならず、学校全体の制度改革、支援体制に着手しています。

このような流れの中で、学校に大きな期待が寄せられていますし、学校の果たす役割は極めて大きいと考えます。そして学校教育の一端を担う私たち保護者の果たす役割も重要です。ですから私たち関わる当事者が具体的に声を上げていくことが、本当に必要な支援や制度制定にたどり着くことだと考えます。その意味で、この全肢P連が保護者の大きな声として大会ごとに宣言を発信しつないでいることは大変有意義であります。

本日、全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会ならびに全国特別支援学校肢体不自由教育校長会は、令和4年8月26日（金）第65回PTA・校長会合同研究大会『北海道大会』を開催し、「肢体不自由のある子供たち一人一人の生きる力を育むために、PTA活動はどうあるべきか～過去からつながる 明日へひろげる 北海道から目指す未来のカタチ～」を主題に研究協議を重ねることができました。

昨年度、北海道大会の開催に向け準備を進めている中、北海道は緊急事態宣言、札幌市においてはまん延防止等重点措置地域となることが続きました。そのような中、北海道大会実行委員は、令和4年度においても、子供たちの命を守ることを最優先に考え、集合しない研究会を提案させていただきました。コロナ禍において、GIGAスクール構想が急速に進み、全国の児童生徒がインターネットを活用した授業を受けることができるようになりました。北海道の教育現場でも、画面越しで子供たちが先生と対話しながら学んでいる姿を見て、オンライン開催となっても全国のみなさんにつながり、

絆を確かめ合うことができる方法があるのではないかと協議を重ねてきました。まさに未来のカタチの模索です。

その「つながる」「広がる」工夫として、Zoomミーティングのブレイクアウトルーム機能を使い、参加された皆様同士でやりとりしていただく場を今回の大会の目玉として設定しました。そして本日、離れていても、対面することができなくとも、子供たちのよりよい未来のカタチを学校、家庭、地域の皆様と一緒に考え、思いを共有することのできる大会となりました。

子供たちには、これからの変化の激しい社会を生き抜いていくために、力強くしなやかに生きていく力が必要です。子供たちが意欲的に学び、社会に安心して巣立っていく環境と支援の輪を充実させるために、校長会、国、関係団体との連携を密にして、全肢P連として以下14の具体的取組をここに宣言します。

- 一、将来の自立と社会参加に向けて学校在学中は、就学支援ファイル、個別の教育支援計画及び移行支援計画の教育系支援計画と障害福祉計画に基づいた各支援計画（サービス等利用計画や障害児支援利用計画等）を効果的に融合し、ライフステージごとに策定・引き継ぎを行うことで、一人一人に応じた学びの輪、支援の輪を広げ、障害の重度・重複化、多様化に対応する特別支援教育の充実及び共生社会の実現を求めています。
- 一、学校において障害のある子供と障害のない子供が共に活動する交流及び共同学習の場を増やし、近い将来社会を担う子供たちの「心のバリアフリー」を育み、ひいては社会全体の意識を変えていく教育の充実を求めています。
- 一、通称：医療的ケア児支援法の理念に基づき、医療的ケアを必要とする児童・生徒が安全で十分な学校教育を受けられるよう、また、保護者の負担が軽減されるよう、看護師等の適正配置をはじめとする体制整備を、教育・医療・福祉の関係者等社会全体で支えていくことを求めます。
- 一、障害のある子供が等しく教育を受ける権利を確立するために、義務教育国庫負担制度及び特別支援教育就学奨励費制度の堅持・充実とその財源の確保、さらに「合理的配慮」の提供を求めています。
- 一、特別支援学校は、その専門性を活かし、近隣の幼稚園や小・中・高等学校への相談支援や巡回指導などのセンター的機能を十分発揮できるよう、特別支援教育コーディネーター、およびスクールソーシャルワーカーの増員と専任制を求めています。
- 一、特別支援教育の一層の充実、インクルーシブ教育システム構築のため、特別支援学校等の教職員の専門性の向上を図ります。このため、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所との連携を推進します。また、OT・PT・ST等の外部専門職を活用した学校全体としての専門性の確保を求めています。

- 一、ICT機器は肢体不自由の児童・生徒にとって学びの可能性を広げ社会を広げるための重要なツールです。GIGAスクール構想によってその成果が児童・生徒一人一人に十分いきわたるようにICT支援員の十分な配置と教職員との連携システム、児童・生徒一人一人に応じた補助具や補助機器の予算化を求めています。
- 一、肢体不自由児や医療的ケアの必要な障害児・者が利用できる、短期入所、放課後等デイサービス、児童発達支援センター、児童発達支援事業所や通園、通所施設の整備と、地域で安心かつ充実した生活ができるよう、事業の拡充を求めています。
- 一、自立と社会参加に向けて、自立支援協議会が十分に機能し相談支援事業が活用でき、希望する日中活動先や就業先へ通うこと、障害者のグループホーム等の生活の場が確保できるよう関係省庁に働きかけていきます。
- 一、卒業後も学び続ける喜びと働くことへの希望をもって生きていけるよう、学び続ける場の確保や施設等へ通所中でもネット環境での講座や就労に向けたトレーニングの併用等ができるようにするなど、生涯学習やキャリア発達を支援するための環境整備を、文部科学省、厚生労働省及び関係各機関等に働きかけ連携を図っていきます。
- 一、障害児を育てる家族のための「家庭支援」「兄弟姉妹支援」の制度の充実を求めています。
- 一、公共・民間の施設・交通機関のバリアフリー、ユニバーサルデザインを活用した建物や設備の整備が進むよう働きかけていきます。
- 一、自然災害等に備えて、学校、家庭、関係機関と連携・協力し、総合防災マニュアルの策定をはじめとして、地域社会において障害のある子供がいついかなる時も安心して、安全な生活ができるよう必要な施策の実現を働きかけていきます。
- 一、感染症流行時に、障害のある子供の学びと命が守られる安心感のある社会の仕組みを、継続して構築するよう働きかけていきます。

令和4年8月

全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会

【主催者謝辞】

全国肢体不自由特別支援学校
PTA連合会会長 空岡 和代 氏



昨年度がオンデマンド開催でした。今回オンラインで皆様と時間を共有できることが嬉しく、一言どうしても御礼を申し上げたいとお時間をいただきました。ありがとうございます。

まず、本大会に際しまして、皆様にご不便等おかけしましたこと、主催者として心よりお詫び申し上げます。次への一歩として広い気持ちでお許しいただき、また次の機会を楽しみにしていただけたらと思います。

分科会発表校としてご準備いただいた皆様、主管校の手稲養護学校はじめチーム北海道の皆様、本当に素晴らしい大会でした。ありがとうございました。

会員研修で五十嵐真幸様が言われました。出会いは人を変えます。本大会では、素晴らしい言葉に出会いました。素晴らしい実践にもたくさん出会いました。そして皆様とこうして画面上ではありますが、出会えたことが明日への私自身の活力です。一人でも多くの方にとって本大会が新たな活力になっていることを願います。

本日は、本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

【開催地 校長挨拶】

全肢P連「北海道大会」実行副委員長
北海道手稲養護学校長 鎌田 典子



開催地の北海道10校を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

本日、閉会式にこうしてお話ができることに心から安堵しております。北海道は一昨年度から準備をしてきましたが、コロナ禍で先の見通しが立たず、どのように実施をしていくかというところからの出発でした。そうした手探りの状態でしたが、このように大会を実施できたことは、全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会の空岡会長をはじめとする、本部事務局、諏訪校長会前会長、伴現会長、昨年度開催校の大分県立別府支援学校の事務局の皆様のおかげであって、ここまでたどりつけました。本当にありがとうございました。

昨年度は、11日間のオンデマンド配信で開催されました。今年度はその開催を受けて、分科会を生で配信し会員同士の交流をしたいと思います。6分科会に分けて担当校を配置しましたが、通信環境を安定させるために、札幌でスタジオを借りることといたしました。スタジオの専門的な技術と知識もお借りして、東京でも会場を設けて、全国に向けて配信を行いました。主管校として誠心誠意、運営してきましたが、何分、初めてのことでありましたので、不行き届きな点が多々あったかと思えます。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

さて、本大会は1日日程ではありましたが、全国の肢体不自由特別支援学校の皆さんとつながっている実感も少しも持っていただけたら大変うれしく思います。本当は会って話したいけれど、会わなくともこんなに身近に感じられることに、心強く力強く感じていただけたら、とてもうれしく思います。また、子どもたちがこれから生きていく時代に必要不可欠なICTの力を私たちも少しでも活用でき、広げていければ幸いです。

基調講演では、文部科学省初等中等教育局視学官の菅野和彦様より、会員研修では北海道旭川市のカムイ大雪バリアフリー研究所で活動をされている五十嵐真幸様より、お話しをいただきました。また分科会では全国の各学校を代表して6校の実践発表をしていただき、それぞれ6名の方に御助言をいただきました。貴重なご指導、御助言をいただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

基調講演、分科会、会員研修など、すべては全肢P連の研究主題である「肢体不自由のある子どもたち一人一人の生きる力を育むためにPTA活動はどうあるべきか」というところにつながっています。私たちが教育活動を充実させていくためには、PTAの皆様のご力は大変重要なものとなっております。この大会で得た成果をもとに、これからも力を合わせて子どもたちとともに歩んでいきたいと思っております。

北海道大会のテーマは、「過去からつながる 明日へひろげる 北海道から目指す未来のカタチ」です。大分からいただいた夢の種をしっかりと引き継ぎ、未来のカタチを北海道から、そしてその未来のカタチを次のステージの栃木へとひろげていきたいと思っております。

最後になりましたが、本大会の開催に当たりご祝辞を賜りましたご来賓の皆様をはじめ、本大会にご協力いただいた全ての皆様、そして全国からご参加いただいた会員の皆様へ心から感謝を申し上げ、来年度の栃木大会のご成功と全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会のますますの発展をお祈りいたしまして、開催地からのお礼のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

【次年度開催校PTA会長挨拶】

栃木県立のざわ支援学校
PTA会長 柳 恵美 氏



令和5年度 全肢P連栃木大会開催主幹校、栃木県立のざわ特別支援学校PTA会長柳恵美と申します。

ここ数年、コロナウイルス感染症の影響で今までとは違った新しい形のオンラインでの大会開催となり、主幹校の皆様は大変ご苦勞だったことと思います。従来よさを生かしつつ、学ぶことがとても多い、素晴らしい大会でした。

さて、来年は栃木大会です。栃木県立のざわ特別支援学校、栃木県立わかさ特別支援学校、栃木特別支援学校の3校で、様々なことを想定し、PTA会員、教員教職員一同で準備を進めております。これからの未来を生きる子ども達が助け合い、手を取り合っていける世界になってほしいという願いを込めて、皆様にも一つでも多くの情報を発信できればと思います。

また、今年には栃木県で「一期一会栃木国体」及び全国障害者スポーツ大会「一期一会栃木大会」が開催されます。全国の選手・関係者の皆様にとって、思い出に残る大会となるよう県民一体となって、おもてなしの心で盛り上げて参りたいと考えております。さらに、栃木県には、日光東照宮を始めとする世界遺産の日光2社1寺があります。絢爛豪華な建物群と周りの豊かな自然環境がとても素晴らしいところです。東京からも新幹線で一時間半と近い場所でもありますので、皆様のお越しをお待ちしております。久々に全国からお集まりいただけるよう、お集まりいただける大会にしたいと準備を進めておりますが、コロナウイルス感染症の拡大状況によっては、検討が必要となるかもしれません。開催方法がどのような形になっても、栃木のよさをお伝えできるような大会にしたいと考えています。来年の夏、栃木大会で皆様にお会いできる日を楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。

Memo

第65回全肢P連北海道大会



北 海 道 大 会

2022